

無動無德、唯受親戚之餘慶、久兼相將之清班。然聞自去年之瘧疾、至今茲之孟夏、風霧易侵、十月全黏於病床之上。效驗難及、一日不離於藥爐之邊。當于斯時、每見賤子至孝之甚深、彌增微臣偏愛之懇篤。嗟乎悲哉、先朝露而填溝壑之後、又恐誰人之扶持矣。抑割分封戶、申充子息之例、縱事希于葉篇、蹤跡絕于往策、然猶或以交職而讓子、或以子爵而讓父者王政之常也。准據此例、有何謗訕乎。伏願鴻慈曲垂矜恤、割件國々封戶五百煙、永充給延子女御。若遂宿慮於愍遺之時、必報朝恩於他生之日。不耐懇志之至、某誠惶誠恐謹言。

康平三年四月廿日

從一位行內大臣兼左近衛大將藤原朝臣賴宗

(女御藤原延子は内大臣藤原頼宗の女なり。)

康平七年

甲辰 紀元一七二四

六月。假揭

【石瀨比古神社棟札】

鳳至郡

二二

康平七歲 大願主 八幡寺現住仁海

奉勸請正八幡宮一社一天奈平寶祚延長祈攸

六月吉日 大檀那 惣氏 子中

神功皇后 右者大隅國桑原郡鹿子島神社

應神天皇 從勸請之所也

仁德天皇 奉崇八幡寺鎮守荒橋郷惣氏神

(この棟札は鳳至郡荒橋郷八幡寺に正八幡宮を勸請せることをいふものにして、その所在地東村の古名を荒橋と稱したりとの俗傳に基づきて假作せるものなるべし。且大隅鹿兒島神社の正八幡は應神天皇等にあらず。但し今の石瀨比古神社が一時八幡宮といひたることは之を想像し得べし。)

應德二年

乙丑 紀元一七四五

九月十五日。入道性信親王、能登國等に於ける封戸を喜多院に寄進するを允されんことを請ふ。

【朝野群載】

三三

入道(性信)二品親王家

請特蒙 天恩、因准傍例、被下宣旨於民部省、所給

本封新加等、前後相並、四百五十烟内二百七十五烟、永

寄置御願喜多院、割充佛聖供灯油新狀

尾張國廿五烟 近江國廿五烟 能登國廿五烟

越後國廿五烟 三月改丹波國 出雲國廿五烟

美作國租穀百石 備中國五十烟 備後國廿五烟

周防國廿五烟 讃岐國廿五烟 土左國廿五烟

右謹檢案内、賜封戸之輩、寄佛事之例、蹤跡居多、不

遵羅縷矣。抑斯院者、去承保二年八月一日、早降綸旨、

已爲御願、被置阿闍梨三人先畢。須經言上、申請別封

也。而件本封等、忝以宗祖之胤子、苟預苟茅之仁恩。今

以其封戸、申置此院家、頗是穩便、豈無裁許乎。望請、天

恩被下宣旨於彼省、本封新加、前後相並、永以寄置、將

給所須、即以院家返抄勸會公文。然者佛前之灯明無絶、

僧中之薰修不懈、先所請鳳曆之萬歲、遂期龍華之三會、

仍勤事狀、謹請處分。

應德二年九月十五日

阿闍梨傳灯大法位信禪

即依請 宣旨下了。

寛治三年

己巳 紀元一七四九

十月。加賀守藤原家道、その留守所をして山城醍醐寺領加賀郡大野郷得藏保に徵課を免除せしむ。

【醍醐雜事記】

三三

應宣 留守所

可早大野郷得藏保奉免醍醐寺庄事

四至 東限津屋寺西細手 南限河 西限濱 北限湊

右保可奉免之狀如件。留守所宜承知依宣行之。以宣。

寛治三年十月 日

守藤原朝臣 在判

【醍醐雜事記】

二四